

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 5 日現在

機関番号：34310

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2014

課題番号：23530786

研究課題名(和文)社会福祉における宗教性(スピリチュアリティ)の国際比較研究

研究課題名(英文)Spirituality in social work: a comparative study

研究代表者

木原 活信(Kihara, Katsunobu)

同志社大学・社会学部・教授

研究者番号：20275382

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、福祉の根源としての価値意識、社会福祉と宗教性としてのスピリチュアリティの関連に焦点をあてている。その際、宗教性を教義ではなく、その未だ組織化されていない霊性としてのスピリチュアリティであると定義し具体的に検証した。Edward Candaの議論を中心に議論しているが、調査対象は、一つは社会福祉事業家の宗教性を歴史的に分析し、その教派性や宗教意識(スピリチュアリティ)について思想史的に分析した。二つは、それらをベースに社会福祉とスピリチュアリティの国際比較(日米)を思想史的に分析した。最終的に、スピリチュアリティにセンシティブなソーシャルワークのあり方を日本の文脈のなかで検討した。

研究成果の概要(英文)：This study focuses on spirituality and social work. The definition of spirituality is widely discussed, with comparative perspectives between North America and Japan. In particular, Edward Canda's definition of spirituality is analyzed within Japanese social work contexts. Through this study, I would like to not only find the academic truth but also create connections and foster mutual support among social workers of many contrasting spiritual perspectives. Finally, this study's purpose is to contribute to developing innovative approaches to spiritually sensitive social work practice and education within the wide context of Japan.

研究分野：社会福祉学

キーワード：スピリチュアリティ ソーシャルワーク

1. 研究開始当初の背景

カナダのある公立の精神病院を訪問したときのことである。そこでは、スピリチュアリティを尊重する方針から、入院患者それぞれの宗教、信仰を尊重し、院内でもそれぞれの礼拝などの宗教行事参加の機会を保証していた。そこにはユダヤ教、イスラム教、キリスト教、仏教等のサービスがあり、各自のニーズに合わせて院内礼拝・宗教儀式に参加している姿が新鮮であった。これは日本の公立の精神病院、福祉施設ではありえない。

日本は、憲法に定める政教分離、公私分離の観点から、宗教を公的な場面で混在させることに取り分け敏感な国であると言える。しかし、日本の政教分離、公私分離は、その本来意図した公（国）が特定の宗教と癒着したりすることを分離するという本来の意図を離れて、一般の人々（世間）に信仰や宗教を表明することを「分離」することになっているようにすらみえる。山折哲雄の「われわれは政教分離の原則をあまりに忠実に、あまりに教科書通りに守ろうとしてきたために、いつのまにか宗教にたいする侮蔑の念を自分たちのうちに養い育ててきたのではないかということである。」「いわば人間観の世俗化が行きつくところまで行ってしまったのである。」（山折,1993:31）の指摘の通りである。この流れが戦後の社会福祉の領域にも色濃く影響されているといえる。

2. 研究の目的

本研究では、上述の問題意識をもって、社会福祉の領域と宗教性（スピリチュアリティ）の関係について北米と日本の比較から明らかにすることである。

3. 研究の方法

欧米の文献、特に北米の Edward Canda の理論を日本のコンテキストに敷衍しつつ、国際比較をしながら思想的に検討した。

4. 研究成果

（1）社会福祉と宗教（スピリチュアリティ）の関係の変遷史（日本の場合）

歴史的にみると、学問領域としての社会福祉学は別として、実践、政策としての社会福祉は、宗教とりわけキリスト教と不可分であった。しかし、戦後、福祉国家成立以降は、「世俗化」の流れは福祉領域にも典型的にみられ、亀裂が生じる。

日本の起源と変遷

社会福祉の歴史形成過程全体は通説によれば、概ね以下のような流れとなる。それは、「宗教的慈善 博愛 社会事業（厚生事業）社会福祉」という変遷を辿るが、その原初形態は宗教的な「慈善」charity と呼ばれるものである。特に欧米ではアガペー的な愛他行為に源流をもつキリスト教的慈善 charity がその起源にあり、それが変遷して今日に至っている。

日本も仏教等の影響があったとはいえ、基本的に社会福祉の発展は近代化と軌を一にして欧米の影響を受け、明治期にキリスト教的慈善を起点に、急速に発展していく。社会福祉の施設・機関をみても、それらは宗教的基盤に立脚した施設が多い。特に近代以降多くの先駆的な働きをなした施設等はキリスト教系が圧倒的に多い。つまり、社会福祉においては、その成立過程の実践場面において、宗教が社会と密接にかかわり、相互に強く関与（対話）していたと言える。

福祉国家をめぐる宗教（スピリチュアリテ

イ) の位置づけの変化

しかし、戦後になって、福祉国家体制がはじまり、「措置の時代」(国家による弱者の庇護というコンセプトで各施設等へ国からの補助金を分配する運営)では、憲法に定める「政教分離」が強調されることになり、宗教を中心に運営していた社会福祉施設は、後退、あるいはそれが微妙な位置に置かれることになった。たとえば日本では、戦前は、宗教団体によってはじまった民間運営の福祉施設等も、法制度によって整備され民間の社会福祉法人となった。こうして社会福祉法人として国の庇護を受けることになった施設は、経営的には安定し、拡大される。しかしそれは、宗教系にルーツをもつ社会福祉法人にとって、その設立時の宗教理念の位置づけは、必然的に大きく変化、あるいは世俗化させられることになり、その基盤としてのアイデンティティの拡散に苛まれる施設が多くなっている。創設者の理念は形式上保持するが、実際の運営資金の大半が、国の補助金であり、それゆえに国の厳格な規定、指示、の下で運営することを余儀なくされ、結果的に宗教的色彩は弱まっていくことになる。

現代の新しい位置づけ

ところが 21 世紀に入り、財政難による福祉国家の曲がり角により、政府自体が掲げた方針転換による 2000 年の社会福祉基礎構造改革以降の変化は、社会福祉界にとって大変革となったが、福祉領域での宗教の位置においても重要かつ新しい歴史の流れが到来しようとしている。それは国家の庇護という措置制度から、市民的契約に基づく新しい社会福祉制度へと大きく方針転換による「公から公共へ」という市民的公共圏の出現あるいは拡大である。好むと好まざるとを得ず、福祉実践

においてもかつてのように国家主導の福祉ではなく、市民的公共圏という文脈のなかで新しい公共的福祉空間が期待され、またプライベートイゼーション(民営化)の波と合わせて、国家の責任や役割が大きく後退した。その分、民の力や、企業の参入とともに、宗教それ自体の役割にも改めてスポットがあてられるようになった。

(2) 対話の方法としてのスピリチュアリティ

今日、社会福祉と宗教の関係で新しい社会福祉基礎構造改革の時代に再び、宗教の重要性が浮上したことは先述したとおりであるが、だからといってそれだけで対話がすぐに「再開」されるほど、ことは単純ではないし、乗り越えなければならない幾つかの難題がある。一つ目は先述した政教分離の課題、二つ目は宗教者(団体)のパッションの課題、三つ目は市民の宗教への嫌悪感、である。しかし、政教分離の国家の問題(憲法解釈)や宗教者のパッションの課題はさることながら、実は、それ以前に市民感覚としての宗教への嫌悪は根深く、宗教それ自体とはなお相当の距離感があることは否めない。

このような今日の宗教と社会福祉の対話の微妙な亀裂に対して、カギとなるのがその代替としてのスピリチュアリティという概念である。欧米でも、この傾向は様々な領域で顕著である。スピリチュアリティは、宗教と密接に絡みながらも、宗教教団等の組織という枠やシステムをもたない自由な個人個人の側面から「広い意味での宗教を人間の側の特性に即して捉えようとする言葉」(島園, 2012: 5)であると解すると、確かに、組織としての宗教よりも、スピリチュアリティのほうが、現

代の社会や国家により身近に接近し、そして両者が対話可能な形態となりやすい。社会福祉の領域においても、専門性、科学性という近代化が一層進行し、確実に世俗化の流れが形成されている一方で、欧米では、ポストモダニズム、ナラティブ論の出現、そしてスピリチュアリティが台頭してきている。

(3) 社会福祉におけるスピリチュアリティ

福祉実践の場合における福祉と宗教との対話とは、スピリチュアルな視点を介在させれば具体的には、援助者、施設機関の福祉利用者への様々な支援に直接かかわってくる。実際には、Canda も指摘するとおり、世俗化した現代では福祉利用者のほうがむしろ宗教的であるのに対して、援助者のほうがあまりに宗教に無関心(価値中立であろうとする場合)であるという点が多く見受けられ、それがそもそも問題でもある。

具体的な社会福祉実践におけるスピリチュアリティの実際の場面は様々なものが想定されるが、議論者が主要な課題としてとりあげるのは以下のとおりの実践例である。これらのうち幾つかはすでに議論者含めて検証され、欧米ではかなりの先行的蓄積もある。なお、その傾向や特徴は、これまでターミナルケアなどの「死」を問題にした課題は、スピリチュアリティが強みを発揮して認知されてきたところであるが、以下にあげるとおり、必ずしも、それに限定されるものではなく、社会福祉全般を覆い多岐にわたってきている。それゆえに今後、このスピリチュアリティを介在させた社会福祉と宗教の対話がますます広がっていく可能性がある。社会福祉界や宗教界はそれにどう応えるのであろうか。

貧困・無縁・ホームレス支援

無縁社会への希望の支援(奥田牧師の例)

児童・家族福祉

児童虐待の親子の家族再統合、和解

里親や養子縁組の児童への真実告知

障害者福祉

中途障害者への障害の受容、障害の意味づけ

高齢者福祉

介護施設等での高齢者の看取りをめぐるケア

認知症高齢者へのケア、当事者への尊厳への意識

精神保健福祉

統合失調症者への世界への理解

アルコール臨床、依存症治療(AAなどのSHG)

死生臨床ケア

自殺予防と遺族ケア、グリーフケア、ターミナルケア

福祉教育

援助者であるソーシャルワーカー等の自己覚知(スーパービジョン)

(4) スピリチュアリティの国際比較

スピリチュアリティと社会福祉の課題や具体的な実践の分野についてこれまで議論してきたが、しかしこれまでのソーシャルワークの議論の理論のベースにある研究は、北米を中心にしたコンテキストのなかでの議論であるが、アジアという文脈に応用しようとした場合、キリスト教と仏教、儒教、神道などという宗教的倫理的価値観の差異、個人主義と集団主義という社会的意識等の差異、などというコンテキストにかかわる議論が必要になってくる。

この点で、北米で、ソーシャルワーク研究、教育を経験しつつ、日本と客員教授を歴任した二人、Edward Canda と Daniel Lee より、インタビューをしてソーシャルワークとスピリチュアリティについての進捗状況について共通点と差異についてリサーチをした。それによると、北米では、スピリチュアリティの学会が発足し、またソーシャルワーカー団体においても、実践のガイドラインでスピリチュアリティについて言及し、それにセンステイヴである。また、文献から両者のインタビューを補足すると、北米では、現在、Society for Spirituality and Social Work という学会が1990年に発足して活発なアカデミック、福祉実践の両面で動きを示していることに象徴されるようにソーシャルワークにおけるスピリチュアリティ研究が盛んになっている。

これに対して、日本では、日本キリスト教社会福祉学会、仏教社会福祉学会など宗教と社会福祉に関連する学会はあるが、北米のようなスピリチュアリティとソーシャルワーク学会というのではない。韓国においてもこの傾向は同様である。この点は、ソーシャルワークとスピリチュアリティの研究の関心、厚み、すべての面において、アジアでは遅れをとっているといえる。

また、日本、韓国が、理論形成、ソーシャルワーク教育においても北米のソーシャルワークの科学主義的側面あるいは専門主義的側面への「模倣」と追随傾向にあるが、Candaによれば、1990年代より北米では、ソーシャルワークにおいてポストモダンの流れが顕著で、科学主義的傾向への限界から、ナラティヴ志向やスピリチュアリティへの関心が台頭している。日本や韓国ではこれらの流れはまだ大きなものとなっていない点である。

一方で、スピリチュアリティという概念をつかわないまでも、アジアに根強くある和の文化や儒教精神などは、福祉利用者には未だに色濃く残っている。たとえば孝行、義理などである。しかしながら、日本のソーシャルワーカーのほうが、科学主義的な客観的主義によって、あるいは前述したとおり、政教分離をあまりに強調する傾向により、これらの価値観への関心が薄く、また宗教への嫌悪感や乖離現象が顕著であるという点である。これらのことは、日本のソーシャルワークにおける大きな課題であると言わざるをえない。

参考文献

- 島園進(2012)『現代社会とスピリチュアリティ』弘文堂
- 藤藪庸一(2011)「特定非営利活動法人 白浜レスキューネットワーク(和歌山県)の取組」総務省『平成23年度自殺対策白書』pp.44-47.
- 山折哲雄(1993)「『政教分離』再考」『世界「宗教」総覧』新人物往来社
- Canda, E. R., & Furman, L. D. (1999). *Spiritual Diversity in Social Work Practice: The Heart of Helping: the Heart of Helping*. Oxford University Press. 14(3), 289-301.

5. 主な発表論文等

- 〔雑誌論文〕4本
- 2013/01 市瀬晶子、木原活信「自殺におけるスピリチュアルペインとソーシャルワーク」『ソーシャルワーク研究』38-4号 pp.28-34. 査読なし(依頼論文)
- 2013/01 木原活信「無縁社会のなかのキリスト教社会福祉のミッション グラサの人の叫びに耳を傾けながら」『キリスト教社会福祉学研究』第45号 pp.4-15. 査読なし(依頼論文)

2012/10/01 木原活信 「自殺予防における「福祉モデル」の提唱」『社会福祉研究』115号 鉄道弘済会 pp.2-11.査読なし(依頼論文)

2012/01/31 木原活信 「ソーシャルワーク実践におけるグリーンワーク」『ソーシャルワーク研究』37-4(148) pp.4-16.査読なし(依頼論文)

〔学会発表〕 6件

2014/11/08 Kihara,K.(木原活信) “A History of Social Welfare at Doshisha University: A Case Study” NACSW’s Convention 2014 in Annapolis, U.S.

2014/09/12 木原活信、日本宗教学会 招待講演 シンポジウム 宗教と対話「社会福祉とスピリチュアリティ」同志社大学

2013/11/02 Kihara,K.(木原活信) “Joseph Hardy Neesima and a brief history of social welfare at Doshisha University” the 5th joint seminar at Chung-Ann Univ. in Seoul

2013/09/15 木原活信 「社会福祉哲学とスピリチュアリティ」 日本社会福祉学会 北星学園大学

2012/04/28 木原活信 「文化多様性のなかのポストモダン・ソーシャルワークの可能性 現代日本の「無縁社会」、「孤独死」、自殺をめぐる現状から」韓国社会福祉学会 春季大会 韓国保健福祉人材開発院、オソン市(Osong)、韓国 シンポジウムテーマ 『家族構造の変化と社会福祉の対応』 pp.154-189.

2011/09/16 Takashi Okura, Akiko Ichinose, Ran Tanabe, Katsunobu Kihara, Takeo Nakayama. Bereaved Family Members’ Expressed Hopes for

Information after Suicide in Japan: Focus Group Interviews with Survivors. The 26th World Congress of The International Association for Suicide Prevention (IASP), Beijing, China. 2011. Sep 13-17.

〔図書〕 4件

2014/09 木原活信 『社会福祉と人権』ミネルヴァ書房 196頁

2014/06/10 日本キリスト教社会福祉学会 編 『日本キリスト教社会福祉の歴史』(ミネルヴァ書房) 編集および第1章、第14章、終章、巻末資料を執筆 木原活信 「世界のキリスト教社会福祉の歩み」 pp.18-29 「国際動向と国際団体の歩み」 pp.370-374 総頁数 494

2012/10/20 木原活信、小山聡子編著 『ソーシャルワークの思想』(日本社会福祉学会監修 対論 社会福祉学4) 中央法規出版 「ソーシャルワークにおける歴史・思想・価値・イデオロギー」プロローグ、pp.29-31 エピローグ p.76. 「ソーシャルワークにおけるポストモダニズムとモダニズム 社会構成主義の論点を踏まえて」 pp.87-89. エピローグ p.136.

2011/05/07 Kihara,K.(木原活信) “Social Work Education in Japan: Historical perspective”, (pp.209-223) Selwyn Stanley ed., Social Work Education in Countries of the East: Issues and Challenges. (New York: Nova Science Publishers, Inc.) 641.

(6) 研究組織

木原 活信 (Katsunobu Kihara)

同志社大学・社会学部・教授

研究者番号：20275382